

# マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創設しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

text: Max E. Ammann design: Dynamite Brothers Syndicate

## ドイツ問題

ドイツは疑う余地なく世界の馬術大国だ。それを以下の記録が証する。

・馬術がオリンピックで正式種目となった1912年のストックホルム大会でドイツは当時15あったメダルのうち4つを獲得した。これは障害飛越と総合馬術のメダルだが、その時に馬場馬術が種目にあつたならば（馬場馬術は28年から正式に種目として採用された）、スウェーデンに次いで銀メダルを得たに違いない。

・ストックホルムから昨年のロンドンまでにドイツがオリンピックの馬術競技で得たメダルの数は85。ドイツは20年、24年、48年と3回、第1次、第2次の2つの世界大戦の後、参加が認められなかった上での数だ。ドイツより広大なアメリカ合衆国は49個、スウェーデンは41個、イギリスは32個を獲得している。ちなみによく知られる通り、日本は1個だ。

・このドイツの強さはこの100年以上にわたりF E Iの全種目でトップグループにあることから明らかだ。69年にF E Iはドライ



ビング（馬車競技）を4つ目の正式種目として採用すると、最初の年から上位入賞を果たした。80年代に入り、ヴォールディングとエリランクスがF E Iの種目に採用されるとヴォールディングで優勝、そしてエリランクスでも上位グループに入った。F E Iでもっとも新しく採用されたレイニングでもドイツはいくつかの選手権で優勝をしている。

・このドイツの成功には当然、世界に範たる馬産業に帰するところが大きい。ハノーバー、ウエストファール、ホルシュタインといったトップホースの生産のみならず、オルデンブルク、バイエルン、ラインラントなどの馬産のさほど盛んではない地域からもチャンピオン馬が出ている。

・ドイツはこの100年以上、アーヘンをはじめとした世界に名だたる競技会が開催されている。もちろんアーヘンが世界の競技会の頂点であることは言わずもがなだが、そのほかにハンブルグダービー、そしてライプツヒとシュトゥットガルトのワールドカップがある。さらに、ド

ナウエツシゲン、ヴィスバーデン、ネルテン・ハルデンベルク、ブレメン、ミュンヘンなどの競技会が控えている。こうしたメジャーな競技会のひとつでも他国で開

催されたらなら一大イベントとなるだろう。

こまでを読んだらドイツの優位は永続的に続くと思われるだろう。確かに近年のヨーロッパ選手権を見る限りは、その地位は約束されたものと思える。総合馬術では2年連続の優勝、馬場馬術ではふたたびトップを取り戻し、失望感が漂う障害飛越だがそれでも団体で銀メダルを確保しているのだ。しかし、今のドイツは



馬術大国ドイツを象徴するようなウエストファーレンファームの馬術ショー。スタリオンを巧みに乗りこなす技術の高さを誇る。  
© Yasuo Konishi

根本的な問題を抱えている。近年の競技会の運営において資金の確保が危ふまれ、それはこうした競技会に対する人々の関心が薄れていることに起因する。とくにテレビ放映の視聴率が下がっている。これはそのままスポンサー離れにつながるのだ。

ここ20年、いや10年でもドイツで開催される障害飛越の競技会は他国の垂涎の的だった。全ヨーロッパの競技者がドイツでの出場を望んでいたのだ。アーヘンはまだ



CHIO アーヘン大会は世界のトップライダーが出場する最高峰の競技会だ。  
© Chkako Okazaki(UPP)

ろん、ハンブルクやウィスバーデンも憧れの地だった。ヨーロッパに遠征するアメリカ人はこぞドイツをベースに活動していた。ドイツの競技会は統制のとれた運営、効率のいい競技の流れで知られ、そこにはすべてのトップライダーが揃った。10年前、賞金は高額だった。これはベルギーでも、オランダでも、スイスでも同じ状況を呈していた。しかし、今この状況に変化が起きている。



ロンドンで開催されたグローバル・チャンピオンズ・ツアーに出場し、CSI5\*で3位に入ったクリスチャン・アーマンとタルベズ。  
by courtesy of Longines

このドイツの4トップライダーの自国の大会に対する軽視はドイツ馬術界を揺るがした。もちろん、口を手にできるのだ。

ここ数年、新たに競技会を開催する地が増えた。ドバイ、香港、リオデジャネイロで開催される競技会ではこれまで聞いたこともないような高額の賞金が用意されているのだ。これまで世界各地の競技会を旅する障害飛越の選手はワールドカップのファイナルとして最後にラスヴェガスとクアラ Lumpur に辿りついたものだったが、今は高額賞金の誘惑から新たな最終地を目指すようになってきている。その代わり、かつてド

イツシーと呼ばれる華やかな一連の競技会が生彩を失っているのだ。

数カ月前、この状況がはっきり見て取れたのがドイツ選手の欠場だった。4人のドイツのトップライダー、ルトガー・ピアハウム、クリスチャン・アールマン、マルコ・クッチャー、フィリップ・ヴァイスハウプトは、ドイツ馬術連盟の前会長、ランズベルク伯爵が臨時するバルブで開催された自国のドイツ選手権を欠場し、ロンドンの競技会を選んだのだ。その賞金額が明白にその理由を語る。ドイツ選手権の勝者に与えられる最高額は2万5000ユーロ。一方のロンドンでは勝者は15万ユーロを手にできるのだ。

これがドイツ選手権のような大きな競技会に直接影響することはないが、これが事態を進めることになったと思われるのが、ゲラとハーヘンブルクというふたつの歴史ある国際的な競技会のキャンセルだ。その理由は単純明快で、運営費をまかなうためのスポンサーがつかなくなったのだ。

映されたこのレースが今ではまったく放映されていないという事実が馬術界への教訓としたのは、事態に向き合い、きちんとした手順で収めることだった。さもなければ馬術の放映がドイツのテレビ局から撤退するだろうと。

テボリでは18歳から23歳の女性のボランテニアが350人も集まり、彼女たちは大会に関われることを大いに楽しんでいる。こうしたボランテニアは大会のTシャツをもらえ、関係者用の食堂で食事を取れることが楽しくて仕方ないのだ。自分たちが大会を支えていることを誇りにしている。

## 何

が起きたのだろうか。この事態の引き金となったのは2008年の香港で馬術競技が行われた北京オリンピックで、クリスチャン・アーマンが関わったカプサイシンのドーピングであるの一言を待たない。ドイツ馬術連盟はこの事態をめぐりに収めた。しかし、ドイツのテレビ各局はこの事態を重く受け止めたのだ。自転車のツール・ド・フランスのドーピングで敏感に反応し、かつては毎日放

映されたこのレースが今ではまったく放映されていないという事実が馬術界への教訓としたのは、事態に向き合い、きちんとした手順で収めることだった。さもなければ馬術の放映がドイツのテレビ局から撤退するだろうと。

テボリでは18歳から23歳の女性のボランテニアが350人も集まり、彼女たちは大会に関われることを大いに楽しんでいる。こうしたボランテニアは大会のTシャツをもらえ、関係者用の食堂で食事を取れることが楽しくて仕方ないのだ。自分たちが大会を支えていることを誇りにしている。

08年以前からARDとZDFとはほとんどの馬術競技の放映をローカル局に移行していた。今年この2局が馬術競技を放映したのは年たった2時間だけなのだ。ローカル局は今でも90時間の馬術競技の放映をしているが、10年前にはこれが340時間もあった。この放映時間の減少に加え、スポンサー候補はこうしたローカル局による放映がいかなる価値があるのかという疑問を突きつける。どのスポンサーもアーヘンには3競技に加えドラヴィングとヴォールディングの最高レベルの選手が集まることを知っている。ローカル局が放映するのは、アーヘンよりも格下のトップライダーの参加は半分以上というヴァイスバーデンなど。

### マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかわり、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。